

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

知識と学問

知識や学問というと、特別の人に備わるものと思われるかも知れないが、特別の人ではなく、全ての人に備わっている。自分は知識も学問もない、というのは外向けの辞令としては解るが、本心で知識も学問もない、と思っているのは間違いで、知識と学問は誰にもある。ただ、その広さや深さに個人差が大きいというだけである。知恵という言葉も、知識や学問に関係している。知恵は、ある課題の解決のための創意・工夫で、知識や学問を基にして出てくる。

物事を良く知っている、あるいは常識や習慣を良くわきまえている人のことを“物知り”ということがあがる。知識が豊富といえば品が良い。こういう場合の知識には、学問を含んでいるかも知れない。ただ、知識が豊富でも、学問は知らないと自分で言う人もいる。

学問を知って物を知らず、と学者を皮肉る言葉もある。学問の意味は、時代や立場によって変わる。江戸時代より前には、現在のような国民の義務教育の制度はなかったが、学校はあった。学舎(まなびや)という方が言い得ているかも知れない。識者が門を開き、志のある者に教える場、塾、寺小屋など、教育を受ける場はあったが、生徒は限られていた。そこで教えられることが学問であった。文字の読み書きは基本的な学問であった。礼などの高度な事柄も教えられた。文字の読み書きは、現在は常識とされているが、知って当たり前になれば、学問は常識とされる。読み書きを初めて知る児童にとって、読み書きは常識ではなく学問である。日本語を知らない外国人が日本語を学ぶ場合も、同じことが言える。学問は皆が知れば常識、皆の知識となる。

学問の分野は多様で、細分化は益々進んでいる。各分野とも深みが増している。限られた狭い分野で深い知識を持つと言うのが現在の学者・研究者の一般的傾向だが、関連する他の分野に無関心では済まされなくなっている。専門分野は深く、他の分野は浅く、というのが現実的な姿であろう。人間の能力は限られていて、広く深い知識の持ち主は神でしかない。

江戸時代末期から明治時代初期にかけて生きた清水次郎長(しみずのじろちょう)についての話がある。次郎長は現在の静岡市清水区に住んでいた。学者であった杉享二(すぎこうじ)が、駿河(静岡方面)に居た頃、次郎長と夕刻に会って、雑談のとき月が出ていたので次郎長に「月がなぜ満ち欠け、潮がなぜ干満するか」と問うたところ次郎長は、知らないと答えた。次郎長は海端に住んでいて、潮の干満を知っている。夜には月が出て、満ち欠けするのを見ている。次郎長は、潮の干満と月の満ち欠けを、知識として持っていた。しかし次郎長は、なぜそうなるかを知らなかった。学者は次郎長に理由を説明し、次郎長は初めて聞いたと大変驚き、喜んだという。

学者は太陽と地球と月の関係や、月齢と潮の干満とが決まった関係にあることを知っていたであろう。だから、月の欠け方によって、潮の干満の時間を浜辺に行かなくても知ることができる。また潮の干満の様子によって、月を見なくても月齢を知ることができる。月の満ち欠けが太陽と地球と月の位置関係によることや、月齢と潮が関連して変化するということは、次郎長にとっては学問であったと言えよう。

自然現象に応じた行動は動植物にもある。ある種の陸蟹は月齢で産卵の時期を選んでいるし、ある植物の花は太陽を追って向きを変える。それなら動植物にも学問があるかと言えば、学問の意味をどう考えるかによって、あるとも、ないとも言える。驚くほど巧みな知恵で生命をつないでいる生物もいる。その知恵の元を知識と言うべきか、学問と言うべきかは分からないが、彼らはそうして生きている。

知恵や知識が全くないものは生物ではない。人間の持つ知識の量には個人差があるが、知識は若いころに増え、高齢になると減っていき、最後には全くなくなる。例外はない。